

滋賀県の茶作り歌における伝承の特徴 および歌詞についての一考察

梁 島 章 子

A Study of the Characteristics of the Transmission and the Texts of the Tea-making Songs of Shiga Prefecture

Takako YANASHIMA

Received April 30, 1987

抄録：本研究は、滋賀県の茶作り歌について、伝承の特徴および歌詞の作業歌としての特徴と地域性を、京都の茶作り歌と比較して考察することを目的とした。滋賀県の茶作り歌は、その製茶作業の特徴、すなわち荒茶仕上げであることから、京都と比較して伝承曲種が少なく、選別や仕上げのための〈茶選り歌〉や〈茶ひり歌〉は、伝承されていなかった。作業歌の伝承には、音楽の様式と同時に、生活を支える産業のあり方も関係することがわかった。作業歌としての歌詞の特徴は、京都と同様、作業に関係のある内容の場合、作業の性格が歌詞の内容を規定していた。また、歌詞の地域性については、表現の内容で、京都と異なるものが見られ、表現の内容および用語の使い方では、滋賀県内で差が見られた。こうした歌詞の地域性は、民謡の重要な特質である流伝、伝播の特徴を解明するための手がかりとなるであろう。

索引語：茶作り歌 民謡 伝承 歌詞 地域性

Abstract: This is the study of the tea-making songs of Shiga prefecture. The songs are examined in terms of the characteristic of the transmission, contents and region as a work song, and then compared the songs of Kyoto.

The lesser varieties of songs are found in Shiga than Kyoto, and the songs for the work such as selecting leaves or finishing are not found in shiga, because the final processing of tea-making is not done.

It became clear that a transmission of work songs is related not only to musical styles but also a way of the manufacturing which support the people's lives. When a content is directly related to a work, a type of a work determines contents of song texts, which is also true to the tea-making songs of Kyoto.

Some of the contents of the song texts differ from these of Kyoto, and the contents as well as the way of using vocabularies differ even within the prefecture.

A regional characteristics of song texts will be a significant clue for understanding a transmission and diffusion of folk songs.

Key Words: tea-making song, folk song, transmission, song text, regional characteristics.

は じ め に

本研究は、昭和59、60年度の滋賀県民謡緊急調査¹⁾によって採集された資料を基に、行われたものである。

滋賀県の東部から南部にかけては、境を接する京都府、奈良県、三重県などの気候温暖な地域とともに、お茶作りに適したところで、古くから煎茶の生産地として知られてきた。そして、昭和初期に製茶作業が機械化されるまでは、その製造過程は手作業で進められ、茶摘みや茶揉みなどの作業に、作業歌が歌われてきた。

本研究は、滋賀県で歌われてきた茶作り歌の、伝承の特徴および歌詞の作業歌としての特徴と地域性について、京都府山城地方の茶作り歌のそれと、比較しながら考察することを目的とする。

1. 滋賀県の茶作り歌の伝承の特徴について

(1) 採集された茶作り歌の種類

滋賀県のお茶の主な生産地としては、神崎郡永源寺町の政所（政所茶）、甲賀郡信楽町の朝宮（朝宮茶）、同郡土山町一帯があげられる。昔から産出量が多いが、そのほとんどは、荒茶として仕上げられ、宇治茶や静岡茶の原料となってきた。

手仕事による製茶の作業には、一般に、茶畑での茶摘み、摘んだ葉を蒸す作業、葉さばき（露切り）・しな揉み・本揉みなど焙炉（助炭）の上での茶揉み、古葉や芯などを選び分ける茶選り、箕を使ってごみを取り除く茶ひりなどがあり、作業の歌としては、〈茶摘み歌〉、〈茶揉み歌〉、〈茶選り歌〉、〈茶ひり歌〉（〈箕の歌〉とも呼ばれる）などが、一般に知られている²⁾。京都の茶作り歌の場合、〈茶摘み歌〉と〈茶選り歌〉は、茶摘みや茶選りが女性の仕事であったところから、主に女性によって、作業の退屈をまぎらわせるための「なぐさめの歌」として、また、〈茶揉み歌〉と〈茶ひり歌〉は、茶揉みや茶ひりが男性の仕事であったところから、主に男性によって、作業の能率をあげるための「調子をとる歌」として、それぞれ、伝承されてきた³⁾。

今回の調査でも、手作業の工程は、多少の呼び名の違いがあるものの、ほとんど同じように説明された。すなわち、茶摘み、生葉の蒸し、露どり、しな揉み、揉みきり、さいせい（こなし）などの工程である。しかし、その中で作業歌が歌われていたのは、茶摘みとしな揉みであった。他には、茶摘み歌の節で歌われた〈茶選り歌〉が一曲だけである。歌の伝承者は、京都と同様、〈茶摘み歌〉は女性であり、〈茶揉み歌〉は男性であった。

表1は、茶作り歌の採集地と採集曲数を、図1は、その採集地の位置を示したものである。表1および図1に見られるように、滋賀県の茶作り歌は、3つの主産出地周辺で採集されているが、中には、京都の宇治田原へ出稼ぎをした人の歌があったり、他の地域から出稼ぎにきた人の歌を覚えていて歌った人があったりした。茶作り作業では、気温の差により茶摘みの時期に差があるところから、近畿の茶生産地の間で茶摘みや茶揉みの手伝いの応援が行われたり、各生産地を移動する茶摘みや茶揉みの出稼ぎが行われたりしたのである。例えば、水口町で採集された2曲の内の1曲は、土山町で歌われていたものであり、他の1曲は、三重県の伊勢地方から出稼ぎにきた人が歌っていた節を憶えたものであった。

(2) 製茶作業と伝承された作業歌の種類

(1)で述べたように、滋賀県で採集された茶作り歌は、〈茶摘み歌〉と〈茶揉み歌〉の二種類で

表1 茶作り歌の採集地と採集曲数

採集地	曲種 曲数、 歌詞数	茶摘み歌		茶揉み歌		茶選り歌	
		曲数	歌詞数	曲数	歌詞数	曲数	歌詞数
多賀町大君ヶ畑		1	(5)	3	(6)		
愛東町外		2	(2)				
永源寺町君ヶ畑				1	(2)		
政所		2	(6)	1	(2)		
杜葉尾		1	(1)	2	(3)		
山上		2	(3)				
八日市市大森町		1	(2)				
土山町北土山		2	(5)		(4)	1	(3)
大野		1	(6)				
大河原				2	(2)		
徳原				1	(1)		
水口町三本柳	2※	(5)			(2)		
信楽町朝宮	3	(4)		3	(9)		
江田	1	(2)					
宮町	1	(2)					
多羅尾	1	(4)					
大津市高砂町	1	(4)					
合計		2	(51)	13	(31)	1	(3)

※水口町の2曲の内の1曲は伊勢地方の歌であるが、土山町で歌われたものと同じ歌詞で歌われたので、今回の考察からは、はずした。

あった。ここでは、京都に較べてその種類が少なかったことについて、考えてみたい。

まず、京都で、わずかではあるが伝承されていた〈葉さばき（露切り）歌〉は、1曲も、そして、断片も歌われず、話題にもものほらなかった。

また、京都では、歌われていたと説明されながら、わずかに1曲だけしか採集されなかった〈茶揉み（揉みきり）の歌〉は、滋賀でもほとんど伝承されておらず、信楽町に、1人だけ鼻歌でその断片を歌った人があったのみである。しかし、朝宮では、本揉の歌について、「茶揉み作業のまんなかから仕上げまでの仕事師が歌う」「二番師の歌もあって、ドーとひっばって節が長い、えらい歌」などと説明され、また、「二番師はよそから来たが、歌は朝宮の歌を歌った」ということであり、政所でも、「茶揉みの節にもう1つあった」「揉みきりの歌は声が続かん」「揉み歌に長い節」などの説明があり、〈本揉みの歌〉が存在したと考えられる。一方、土山町では、「本揉みの歌は聞かない」ということであったが、『日本民謡大観近畿篇』には、昭和40年に大野で録音された〈揉み唄一仕上げ〉の記録がある⁴⁾。

では、〈本揉みの歌〉が存在していたと仮定して、伝承されていない原因を考えてみたい。京都では、〈本揉みの歌〉が存在したと仮定して、伝承の少ない理由を、他地方から手伝い⁵⁾に来る職人の歌でなじみにくく、また、短期間では憶えきれなかったからと考えたが、滋賀の場合も、朝宮では先の説明にあったように、このことは同様であったと考えられる。ただ、「よそから来て、

- | | |
|--------|--------|
| 1 大君ヶ畑 | 11 徳原 |
| 2 外 | 12 三本柳 |
| 3 君ヶ畑 | 13 宮町 |
| 4 政所 | 14 江田 |
| 5 杜葉尾 | 15 朝宮 |
| 6 山大上 | 16 多羅尾 |
| 7 大森町 | 17 高砂町 |
| 8 大河原 | |
| 9 北土山 | |
| 10 大野 | |

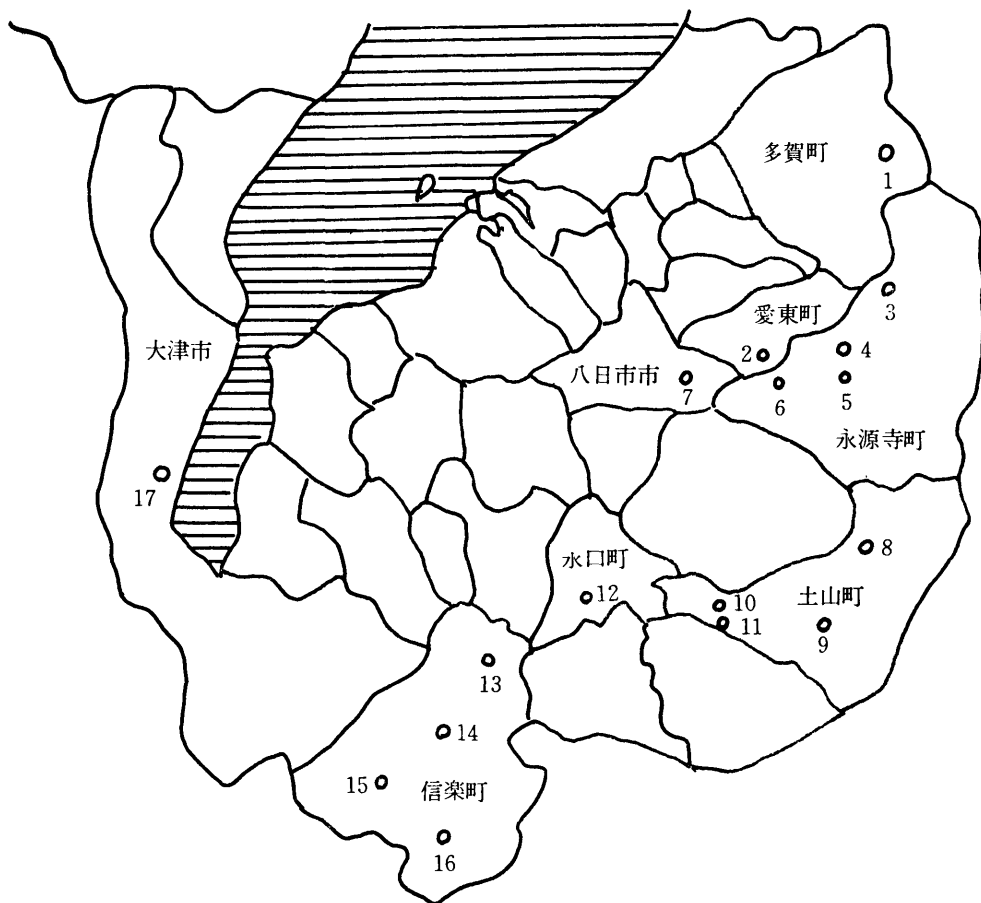


図1 滋賀県南部の茶作り歌の採集地

朝宮の歌を歌った」という説明は、節も歌詞も朝宮の歌であったかどうかははっきりしないが、いずれにしても、歌う人（仕上げの人）が少なく、聞く機会が少なかったと同時に、なじみにくく、憶えにくい歌であったものと思われる。

歌の伝承と深く関係することに、音楽の様式がある。⁶⁾すなわち、八木節様式⁶⁾のものは、歌う人も多く伝承されやすいが、追分様式のものは、歌う人が少なく伝承されにくいということである。

京都の研究では、〈葉さばきの歌〉や〈茶選り歌〉は追分様式の要素が強く、伝承されにくいと考えたのであるが、「本揉み」の作業については、その前の作業である「しな揉み」によく似た作業と考え、歌の様式も、八木節様式⁷⁾であろうと考えていた。しかし、現在、京都府宇治で伝承されている「手もみ製造法（宇治製法）」では、揉み作業の前半である「横まくり（しな揉み）」の部分は、揉む手の動きに繰り返す動作が続き、リズムカルな作業であるのに対し、後半の仕上げの工程（「茶揃え、でんぐり、板ずり」）は、種類の異なる動作が、茶の揉み上りの状態に合わせて、組み合わせられて取り入れられており、技術を伴う細かい作業で、前の「横まくり（しな揉み）」に較べると、リズムカルとはいえない。その上、先に述べた、本揉みの歌を説明することば、すなわち、「ドーとひっばって節が長い、えらい歌。声が続かん。揉み歌に長い節」などから考えると、本揉みの歌は、追分様式の歌であったことも考えられ、この場合には、やはり、歌の伝承に音楽の様式が影響していることになる。

次に、茶選りや茶ひりの歌がほとんど伝承されていなかったことについて考えてみたい。京都の場合は、茶選りや茶ひりの歌は、茶摘みや茶揉みの歌に較べれば、伝承数が少なかったが、確かに、〈茶選り歌〉も〈茶ひり歌〉も歌われていた。

まず、茶選りの歌については、信楽町では、「歌われていた」「茶選りに〈みきや節〉が歌われていた」ということであった。土山町では、「茶選りは節が違った」と記憶する人と「茶選りも同じような節であった」と記憶する人があり、また、政所では、「そうした仕事の歌があったらしいが、歌えない。忘れた」などの答えが帰ってきて、明確な答は得られなかった。これらを総合すると、選別する歌は歌われていたが、歌われる機会が少なく、伝承も早くにとだえたと考えられる。その理由としては、滋賀のお茶の大部分が、他地域の茶生産地の原料となる荒茶仕上げであったことから、選別作業の必要が少なかったと思われることと、茶選りの仕事は茶摘みと同様、女性の仕事であったが、「外」の仕事は若いもの、「中」の仕事は年寄りという分担であったため、「中」の仕事であった茶選りの歌は、茶摘みの歌よりも早く、伝承がとだえてしまったと思われること、などがあげられる。しかし、『日本民謡大観 近畿篇』の古い資料の中にも、滋賀県の選別の歌が1曲も採集されていないということは、歌われる機会が少なかったと考えるべきであろう。

また、茶ひとりの歌については、滋賀県では「ひる」作業を「こなし」と呼んでいたが、その作業は、やはり専門家が担当していたということであり、作業が重労働であるため、「歌っているひまはない」とか「歌はなかった」などの答えであった。荒茶仕上げの場合、茶選り作業と同様、こなし作業そのものが少なかったと思われ、こなし作業の歌はなかったものと考えられる。

作業歌の特徴として、その地域の特産物の製造に歌われる歌は、歌詞を替えて、他の副業にも用いられるということがあるが、滋賀県でも、信楽町では茶摘みの歌の節で草取り歌が歌われ、大津でも茶摘み歌の節で草取りや臼すりの歌が歌われるということがあった。このことから、生活を支えた特産物の製造作業の重要性が、作業歌の必要性和関連したと考えられ、滋賀県の茶作りでは茶摘みと茶揉みが、重要な作業であったといえるであろう。

ところで、これまでの考察では、対象を茶揉み作業を伴う煎茶（玉露も含む）作りの歌と限定してきたが、滋賀と京都の茶作り歌の曲種について考える場合には、京都、それも特に宇治茶の伝統である碾茶^{てん}作りについてもふれなければならない。

抹茶の原料である碾茶に製造される宇治茶は、13世紀前半にその栽培が始まったといわれてお

り、14世紀半ばには室町幕府の指定茶園として不動の地位を築き、江戸末期までは幕府の庇護の下で、天下一の名声を得てきた。その間、1738年（元文3年）に、宇治田原で青製煎茶（宇治製煎茶）が、また、1834年（天保5年）に、宇治で覆下栽培による青製煎茶（玉露）¹⁰⁾が、造り出され、いわゆる手揉み作業を伴う茶作りの青製煎茶製法が各地に広まることになる。

1808年（文化5年）に描かれた「古代製茶図」¹¹⁾によれば、この碾茶の製造工程でも作業歌が歌われていたことが記されている。まず、茶摘みの図の部分には、「摘取の図、女ども歌うたふ、雨天にても休事なし」、「茶摘の人数、園移りの躰、歌うたふ」とあり、茶摘み女の歌が歌われていたことがわかる。また、次の屋内の仕事では、蒸場の図のところ、「此処にては、男女とも哥をうたふ」とあり、「なま茶葉のちりを撰」のところや「むしあげたる葉をきふにあをきさます也」の場面が描かれていて、蒸し・冷却あるいは生葉のちり選りで、男女の歌が歌われていたらしい。さらに、蒸した葉を乾燥する工程を示す「焙炉の図」では、「焙炉、此所にて昼夜哥をうたふ、ほいろ歌といふ、是より場葉といふ」とあり、焙炉の作業にも歌があったことがうかがえる。なお、ここで、あえて「歌」と「哥」の字にこだわれば、この図の作者は、作業歌の何かの違いを「歌」と「哥」を用いて示したことも考えられ、茶摘みの場で歌われたものと、蒸場や焙炉の場で歌われたものとは、スタイルが異なっていたとみることもできるであろう。

これら碾茶作りと煎茶作りを比較した場合、茶摘み作業は両方とも同じ作業であるが、蒸場や焙炉の作業は、異なっている。すなわち、碾茶では、覆下栽培によりわらかけを行う（これは玉露の場合も同じ）ところから生葉にわらのちりが多いこと、焙炉作業で茶揉みをせず、乾燥だけを行うことが特徴的である。また、ここま¹²⁾では栽培者である茶園（農家）の仕事であるが、そのあとのお茶師による仕立て（精製）作業は、「古代製茶図」の「茶見の図、撰の善悪を見別る躰」「二階にて撰茶の躰」「極上御茶仕立の図、紙舗といふ、御茶の葉のかたちまでひとつつつ改る躰也」などの図からうかがえるように、丁寧な茶選りや茶ひりの工程を繰り返して、茶磨で挽くまえの碾茶に仕上げるのである。これら仕立て作業の図の部分に、作業歌の記述はないが、仕立てでの茶選りは「一分四方の葉片」¹³⁾に揃えるなど、根気のいる作業であったところから、「仕事の退屈をまぎらわせ、なぐさめるため」¹⁴⁾の茶選りの歌が、また、精製作業で「仕事の能率を高めるため」¹⁵⁾の茶ひりの歌があったと考えられる。このことは、京都の宇治で採集された〈茶選り歌〉¹⁶⁾が、生葉の選りにも歌われたという事実や、茶ひりは「お茶師番頭さん」の仕事であったという事実からも裏づけられるであろう。

さて、ここで、碾茶作りの歌と煎茶作りの歌の関係を考えてみたい。宇治茶は、明治に入り、碾茶の需要の減少とともに、煎茶や玉露として主に生産されるようになり、仕事の歌も仕事師が同じであったり、作業の内容が似ている場合には、碾茶作りの歌がそのまま煎茶作りの歌として利用されたと思われる。そこで、推察の域を出ないが、両茶作り歌の関係を次のように考えてみた。まず、茶摘みの歌については、両方に共通であったといいきってよいであろう。次に、焙炉歌については、碾茶の乾燥作業で歌われた歌が、よく似た作業である煎茶や玉露の揉みに入る前の「葉さばき（露切り）」の歌として利用され、新に必要となった「しな揉み」のための歌は、新しく作られたか、あるいは、他の労作歌が利用された可能性がある。また、本揉みの歌も、先に述べたように、追分様式の歌であったとすれば、やはり、碾茶の焙炉歌が利用されたかもしれない。京都でB型旋律に分類された5曲は、内4曲が「焙炉師節、焙炉師歌、焙炉歌、焙炉節」などと呼ばれ、その中の2曲は「葉さばき」「さばき歌」と限定されたところから、「葉さばき」

の歌ではないかと考えたが、¹⁸⁾ 残る 1 曲は、「本揉み」の歌として歌われたものであり、これらを考え合わせると、碾茶の焙烘歌が、茶揉みの歌として利用された可能性は大きいのである。

そこで、本揉みの歌については、次のように考えたい。京都でも、滋賀でも、いろいろな表現で、本揉みの歌があったと説明されたが、本揉みに限定される歌があったのではなく、本揉みの仕事をした人が歌っていた歌があって、それがしな揉みの歌とは異なっていたと考えるのである。そして、この場合に、他地域から来て歌われれば聞く回数が少なく、追分様式の歌であれば憶えにくく、また歌う人も少なく、伝承されにくかったわけである。

また、茶選りや茶ひりの歌については、茶摘みの歌と同様、作業の内容が似ているところから、共通の歌であったと思われる。ただし、煎茶の製法の中心は栽培茶園の農家の仕事である茶摘みと茶揉みにあり、それらの歌は必要にせまられて、歌い継がれてきたが、茶選りや茶ひりは茶問屋の仕事であったところから、それらの仕事に従事する人が少なく、伝承者も少なかったといえよう。

これらのことから、もう一度滋賀県の茶作り歌の種類について考えてみると、滋賀県のお茶のほとんどは、栽培茶園である農家で荒茶として作り上げられ、茶問屋へ送り出されるわけで、そこで伝承された歌が、〈茶摘み歌〉と〈茶揉み歌（しな揉み）〉に集中しても不思議はないであろう。

2. 滋賀県の茶作り歌の歌詞について

京都の茶作り歌に歌われている歌詞の、作業歌としての特徴は、作業に関係した内容やお茶の特産物としての自慢・地域の名所などが多く歌われていたことであった。こうした京都の歌での

表2 V：地域の自然や名所、特産、自慢などを歌ったもの

歌	詞	歌われた茶作り歌		
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌
㊦「茶どころ」「縁どころ」「政所」など				
「宇治は茶どころ」	「茶は縁どころ」	(永)政	(永)政	
	「茶は政所」			
「お茶は茶どころ」	「茶は政所」	(永)杜 (永)政	(永)君	
	「お茶は茶どころ」			
「縁のない人」茶山へ行きなれ 茶山茶どころ 縁どころ		(多)大		
㊧「〇〇よいこと」「〇〇の茶畑」「〇〇茶」などの自慢を歌ったもの				
「朝宮よいとこ いたら見てこい 音で名高い 色でまよわせ 旗の旗もらった」	一度はおいで	(信)朝	(信)信 (信)朝 (信)信 (信)朝	
	朝宮の茶畑は			
	朝宮のお茶は			
	香りでよせて			
「親方さんに」				
㊨ 名所を歌ったもの				
「瀬田の唐橋」唐金ぎぼし 水にうつるは 膳所の城		(大)高		

採集地の省略（以下同じ）

(永)政…永源寺町政所 (永)杜…永源寺町杜葉尾 (永)君…永源寺町君ヶ畑 (多)大…多賀町大君ヶ畑
 (永)山…永源寺町山上 (信)朝…信楽町朝宮 (信)多…信楽町多羅尾 (信)江…信楽町江田
 (信)宮…信楽町宮町 (土)北…土山町北土山 (土)大野…土山町大野 (土)大河…土山町大河原
 (土)徳…土山町徳原 (大)高…大津市高砂町 (八)大森…八日市市大森町 (水)三…水口町三本柳
 (愛)外…愛東町外

特徴が、滋賀の茶作り歌では、どのように表われているかをみる目的で、滋賀県の茶作り歌の歌詞を、京都の歌で得られた分類の基準を用いて、整理した。

滋賀県でも京都の場合と同様、多種多様の歌詞が歌われていたが、録音調査ということで、ほとんどが「表向き」の歌詞であった。作業の退屈さや苦しさをなぐさめる必要から、演唱者が「色の入った歌」と説明する卑猥な内容の歌詞も多く歌われたということであるが、茶作り歌の作業歌としての特徴を考えるには、「表向き」の歌詞が適当であろう。

なお、歌の中には、リフレインのあるものや囃子ことばの入るものがあったが、これらについて

表3 WI：作業と季節の移り歌ったもの

歌	詞	歌われた茶作り歌		
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌
⑦「宇治～土山」「宇治～朝宮」 〔宇治で儲けて 〔草津〕で使って 〔合の土山 丸裸 〔木幡〕 花の朝宮で 儲けなおす			(土)北 (信)朝	

表4 WII：作業の工程での仕事の仕方を歌ったもの

歌	詞	歌われた茶作り歌		
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌
⑦茶摘みの仕方				
〔お茶を摘むなら 下から摘みゃれ 上のつらいは あとで摘む		(水)三		
〔お茶を摘むなら 片手で分けて 今年出た葉を 皆摘みゃれ		(信)江		
〔お茶を摘むなら 摘みつけつけな 〔お茶師焙煎の〕 手が荒れる		(信)江 (信)朝		
〔番茶入れるな 軸折り込むな いとし主さんの 手が荒れる		(永)政		
〔お茶を摘め摘め しっかり摘みゃれ 歌い過ぎては 手が留守		(土)北 (水)三		
〔お茶を摘め摘め 摘まねばならぬ 摘まにゃ日本の 茶にならぬ		(大)高		
⑧茶揉みの仕方				
〔お茶は〕揉め揉め 揉まねばならぬ 〔揉まにゃ日本の 茶に〕ならぬ			(永)政 (土)徳	
〔揉めよ〕 揉めよ 揉まな大野の 茶と				
〔お茶を揉め揉め 揉まねばならぬ 揉めば古葉も 粉茶となる		(水)三		
〔お茶よ揉め揉め 番茶も初葉も 揉めば茶となる 初葉となる			(永)杜	
〔お茶を揉まいね 大葉も小葉も 揉めば大葉も 小葉となる			(多)大	
〔揉めよ揉めよと 揉まされるつらさ 揉んだその葉の 色のよさ			(信)朝	
〔揉めよ揉めよと 揉ませておいて 揉めば今年の お茶揉める			(永)君	
〔揉めよ揉めよと 揉ましておいて 〔あとの二番師が 油とる			(信)朝 (多)大	
〔上げ師さんより しな揉みさんは 仕事よけして 銭少し			(多)大	
〔朝も早よから 助炭が燃える 早く持てこい 糊と紙			(多)大	
⑨茶摘みの服装				
〔お茶の芽が出た 笠こておくれ 笠は端折り 晒紐		(多)大		
〔お茶がありゃこそ 夏たびはいて 茜だすきに 菅の笠		(永)政		
〔嫁をとるなら 大野の娘 赤い帯して お茶を摘む		(土)大野		
〔お茶の土山 鈴鹿のふもと 茜だすきの 子がまねく			(土)北	

表5 WIII：作業の苦しさ・むずかしさ・楽しさなどを歌ったもの

歌	詞	歌われた茶作り歌		
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌
⑦「お茶師番頭さん」の仕事之歌ったもの	[お茶師番頭さん めくらならよかる お茶に非難は 言わしゃせぬ [お茶師番頭さん } めくらならよかる お茶に吟味が { なきゃよかる [お茶師番頭さんが } { のてよかる [お茶師番頭さん{が} めくらなら{よかる} お茶{に}小言が のてよかる [は} {よいが} {の}		(水)三 (水)三 (多)大 (土)大河 (土)北	
⑧朝早くから作業をしたことを歌ったもの	[今朝も早よから 助炭にもたれ よれよれよと 手を合やす		(信)朝	
⑨作業のつらさを歌ったもの	[朝のかかりは どないしょと思うた これで練り上げか やれうれし		(信)朝	
⑩作業で楽する方法を歌ったもの	「お茶を摘むなら { 園押し分けて 中のこくだ{て} } 目に掛かる { 園かき分けて } 中のこくだち { 園ひむ分けて } 中の株立 園押し分けて	(永)政 (永)山, (愛)外 (愛)外 (多)大 (八)大森 (土)北		
⑪悪口を歌ったもの	[お茶を摘むなら ふところ摘みゃれ かさが低くても 目に掛かる [どこの茶山でも 豆でも出るが この茶山は 豆も出ん			(多)大

表6 X：男女の愛を歌ったもの

歌	詞	歌われた茶作り歌		
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌
⑦「お茶」に関するもの	[かたい約束 茶園の中で 茶園きれても 緑きれ{な [わたしとあなたは 江戸行き茶つぼ 仲のよいのは 人知らん [お茶の茶の茶の 茶の木の下で まろと話すりゃ 茶がむさる [鯉やもろこは 水の中で住むが 私やお茶師の 腕の中 [茶摘みしてでも 養いまする あつい焙煎師 やめなさい [茶選りしてでも 養いまする 未でわたしを 捨てぬよに	(水)三 (土)大野 (信)朝 (土)北 (土)大野 (信)多	(土)北	(土)北
⑧その他	[思い直して また来ておくれ 鳥も枯きに 二度とまる [わしの殿御に やりたいものは 金のなる木か 卵酒 [思っかよたら 千里も一里 会わずに帰れば また千里 [声はすれども 姿は見えぬ 殿は深山 きりぎりす [しばらくは 文もやろまい 便りもよせぬ 切れたと思うな 末のため	(永)山 (土)大野 (信)多 (信)多	(永)扛	

ては、音楽的考察の中で行うことにして、表では記入を省略し、ここでは歌われた歌詞の内容についての特徴を考察している。

京都の茶作り歌の歌詞の特徴は、次のように分類された。

茶作り歌の歌詞の分類の基準¹⁹⁾：歌詞の内容と作業への関係の有無による分類。

表7 Y：ユーモアを歌ったもの

歌	詞	歌われた茶作り歌		
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌
⑦「お茶」に関するもの		(土)北 (水)三 (信)朝		(土)北
[よい茶できたら	{つぼ入れて}かこえ 娘かこたら {ばばとなる			
[新茶できたら	{つぼ買って}かこえ 娘かこたら {ばばになる			
[茶選りするよな	浮気な人と 添うて気苦労が してみたい			
①その他		(永)山 (永)政 (信)多	(多)大 (永)杠	
[歌はたもとに	千あるけれど 色のまじらぬ 歌はない			
[歌いなされよ	お歌いなされ うとてご気量は さがりやせぬ			
[恋にこがれて	鳴くせみよりも 鳴かぬほたるが 身をもやす			
[こわい顔して	にらんでおれど 落ちりゃ割れます 鬼瓦			
[しらさがが	小首かしげて 二の足ふんで やつれ姿を 水鏡			

表8 Z：その他

歌	詞	歌われた茶作り歌				
		茶摘み歌	茶揉み歌	茶選り歌		
⑦「お茶」に関するもの		(土)北 (土)大野 (多)大				
「お茶の茶の茶の 「お茶も茶も茶も	茶の木の下で} 茶の木の元で}				お茶も摘まずに 色話	
「お茶の茶の茶の	茶の木が枯れて				娘やろにも 縁がない	
①その他		(土)大野 (八)大森 (大)高 (大)高 (信)宮 (信)宮 (土)大河		(土)北		
「わしの屋根から	じゃが来たげなが				仕事しなrai	髪結いならい
「親の意見と	なすびの花は				千にひとつの	あだもない
「私は足嫁	位が高い				下りて茶汲め	弟嫁
「なんぼ好きでも	弟嫁に行くな				こわい兄嫁	おそろしい
「私ゃ知らねど	出雲の神が				結びさんした	縁じゃもの
「なるはいやいや	思うようにならん				ほんに浮世は	ままならん
「朝のど鐘に	昼鐘さんよ				晩になるのが	お鐘さん
「岩に下がり藤	手にとるよでも				人の花なら	見たばかり

V：地域の自然や名所，特産，自慢などを歌ったもの

W：茶作り作業に関する内容を歌ったもの

WI：作業と季節の移りを歌ったもの

WII：作業の工程での仕事の仕方を歌ったもの

WIII：作業の苦しさ，むずかしさ，楽しさなどを歌ったもの

X：男女の愛を歌ったもの

Y：ユーモアを歌ったもの

Z：その他を歌ったもの

表2～表8はV～Zの分類基準ごとに，歌詞を分類したもので，歌詞が歌われた作業と歌われた地域との関係を示している。

(1)「地域の自然や名所、特産、自慢などを歌ったもの(V)」について

表2に見られるように、Vに分類されたものには、政所と朝宮で歌われた歌が集中した。㉑に属する歌詞は、京都では「〇〇は茶どころ」の「〇〇」の部分が、「宇治(うじ)」「狛(こま)」「銭司(ぜず)」など2字の地名で歌われていたが、滋賀では「宇治」の部分はそのままで、「縁(えん)どころ」の部分が丁度5字の「政所(まんどころ)」に歌い替えられ、政所地域の歌として歌われていた。

㉒に属する歌では、「〇〇よいこと」「〇〇の茶畑」「〇〇茶」の「〇〇」の部分がすべて「朝宮(あさみや)」と歌われていた。茶作りの歌の歌詞は、多少の例外はあるものの、いわゆる近世調民謡の詞型である七七七五形で歌われている。多少の字あまりや字足らずが許されるとしても、決まった詞型の中に地名を歌い込む場合、その字数によっては、歌い込む場所が制限される。5字の「政所」はその例である。これに較べて「朝宮」は1字少ないだけの4字であるが、種々の使い方が可能で、「朝宮茶」のような使い方もできる。

さて、地域の名所、特産などを歌ったものが、政所と朝宮に集中したことは、古くから「政所茶」「朝宮茶」などの呼び名を持つ茶どころを実証したといえると同時に、地域性を示したともえるであろう。

また、㉓の名所を歌ったものは1句だけであったが、こうした歌詞は他のあらゆる民謡に歌われる可能性をもっている。

(2)「作業と季節の移動を歌ったもの(WI)」について

表3に見られるようにWIに分類される歌詞は、滋賀県では2句だけが歌われた。この㉔の系統の歌詞は、京都では4ヶ所で、「花の朝宮で 丸裸²¹⁾」といわれていた。土山町では、これの地名を替えて、替歌として歌われていたが、当地朝宮では「花の朝宮で 儲けなおす」にかわっていた。当地の歌である場合には、季節の移りを歌ったものであると同時に、自慢も歌っているものであり、「丸裸」の歌詞はふさわしくないであろう。京都では、他に、「今年やこれきり また来年の 八十八夜の お茶に会う」という内容の歌詞が、比較的多く歌われていた。

(3)「作業の工程での仕事の仕方を歌ったもの(WII)」について

表4に示したように、WIIの分類では、茶摘み、茶揉みの仕方と茶摘みの服装の内容が歌われていたが、京都では、茶摘み、茶揉みの仕方のほか、数は少ないが、茶選り、茶ひりの仕方の歌詞も歌われていた。

まず、茶摘みの仕方については、京都では、「お茶を摘むなら 下から摘みゃれ 上のずわいは 後で摘む」という、下から上への摘み方を示すものがほとんどであって、1つだけ、Xの「男女の愛を歌ったもの」の中に分類した「古葉はいろが 摘みつけつこが わしの主さん摘む じゃない²²⁾」というものが、「古葉」や「摘みつけ(芽の根元)」を入れてはいけなことを示していた。滋賀では「下から上へ」の摘み方の歌詞は1句だけで、お茶師の手が荒れるから「摘みつけ」「軸」「番茶」を入れてはいけないというものの方が、わずかではあるが多く歌われていた。

次に茶揉みの仕方については、内容では、京都と較べて著しい違いはなかったが、政所周辺で歌われている歌詞の中の二、三のことばが、特徴的であった。まず、茶摘み歌にもあった「番茶」や「初葉」「大葉」「小葉」などのことばと、仕上げ揉みをする焙煎師の呼び名の「上げ師」(信楽や京都では「二番師」)である。また、「糊と紙」もただ1例ではあるが、助炭(あるいは焙煎²³⁾)の準備あるいは修理を歌ったものであろうか、めずらしい。これらは、政所周辺、多賀町

で歌われたもので、地域性が見られる。

茶摘みの服装については、京都では、Yの「ユーモアを歌ったもの」の中に分類した「宇治の茶山は 色気がござる 茜だすきに 菅の笠²⁴⁾」という1句に歌われているだけであったが、滋賀では、4句に歌われていた。㊦からは、「茜だすき」のほかに、「赤い帯」して「たび」をはいて、笠は「端折り 晒紐」という茶摘みの服装がうかがえる。

(4)「作業の苦しさ、むずかしさ、楽しさなどを歌ったもの(WⅢ)」について

表5に示したように、㊦の「お茶師番頭さん」を歌ったものは、京都ではほとんどが、茶選りや茶ひりの作業で歌われていたが、滋賀では、茶揉みに歌われていたのが特徴的で、ここでも、茶選りや茶ひりの作業があまり行われなかったことをうかがい知れる。

また、㊦にまとめた「作業で楽をする方法」を歌った「中のこくだち(て)目に掛かる」という表現は、京都では1句も見られなかったものであるが、ほとんどが、八日市以北で歌われており、地域性が見られる。

(5)「男女の愛を歌ったもの(X)」について

表6のXに分類されたものは、2つの例外を除いてすべて茶摘みで歌われており、茶摘みは女性の仕事であったところから、こうした男女の愛を歌う表現は、女性特有のものといえよう。この傾向は、京都の場合も全く同様であった。

ところで、2つの例外のうち、1つは茶選りの歌詞として示されたもので、茶選りも女性の仕事であったわけで、これも女性の表現といえるものである。しかし、もう1つの茶揉み歌として歌われた、「しばらくは 文もやろまい……」は、Yに分類した「しらさが 小首かしげて……」とともに、表現の内容を云々する前に、詞型が五七七七五形で、特徴的である。これについては、次の機会に旋律とともに考察したい。

(6)「ユーモアを歌ったもの(Y)とその他(Z)」について

表7と表8のYとZについて、京都では、男女の仕事にそれぞれ歌われていた歌詞に、男女による表現の違いが見られたが、滋賀ではほとんどの歌詞が茶摘みの歌として歌われていたものであり、男女の表現の違いは見られなかった。

3. 滋賀県の茶作り歌の特徴についてのまとめと考察

滋賀県の茶作り歌についての特徴は、次のようにまとめられる。

製茶作業と伝承された作業歌との関係については、滋賀県の茶作り歌の種類が少なかったことがあげられる。すなわち、伝承されてきた茶作り歌の種類が〈茶摘み歌〉〈茶揉み歌(しな揉み)〉に集中し、選別や仕上げなどの工程の歌である〈茶選り歌〉〈茶ひり歌〉についての伝承および情報は、全く断片的であった。このことは、荒茶仕上げの製茶工程と関係があると思われるが、しかし、選別や仕上げなどの工程について、断片的ではあっても情報はあるところから、皆無であったはずはない。作業歌の伝承は、生活を支える産業のあり方にも影響されるものと思われる。このことは、さらに歌われた歌詞の特徴からも裏づけられたのである。すなわち、本来は選別や仕上げで歌われたであろう「お茶師番頭さん」についての歌詞が、茶揉みの作業で歌われたのである。京都の例では、「お茶師番頭さん」の仕事は選別や仕上げにかかわったと説明されたが、滋賀では、「お茶師番頭さん」の仕事の中心は、茶揉み作業の吟味にあったのであろう。

また、茶揉みの後半の工程で歌われる〈本揉みの歌〉は、滋賀でも京都と同様、歌われていたと説明されながら、採集されたのは鼻歌で歌われた1曲だけであった。このことから、煎茶の茶作り歌を、それ以前から歌われていたと考えられる碾茶の茶作り歌との関係から、改めて考えなおした結果、煎茶の茶作り歌には、碾茶の茶作り歌が似た作業に利用された可能性が考えられた。すなわち、茶摘みや茶選り、茶ひりの歌は、作業の内容が同じであり、作業をする人も両方の作業にたずさわったと考えられるところから、ほとんどそのまま利用されたと思われる。また、碾茶の焙烘の歌は、煎茶作業で似た動作である葉さばきと、しな揉み作業ほどは繰り返し動作の多くない、本揉みの作業をする人によって歌い継がれ、しな揉みのためには、そのリズムカルな動きに合う新しい歌が新に加えられたと考えられた。そして、その伝承は作業での必要性和同時に、その音楽の様式とも関連し、特に、葉さばきや本揉みで歌われたと思われるものと、茶選りで歌われたものは、追分様式であったため、また、その作業には、他の作業におけるよりも、年配者が従事してきたため、はやめに伝承がとだえたと考えられたのである。

また、本揉みの歌については、茶摘みやしな揉みのように限定された歌があったのではなく、本揉みの作業に従事する人が歌っていた歌があったと考えることにした。本揉みの作業をする人は技術を持った職人であり、古くから碾茶の焙烘師として作業をしてきた人であったり、他所から出稼ぎに来た人であったりすれば、それらの人たちの歌を聞く機会も少なく、その上、その歌が憶えにくいものであれば、伝承されなかったのも当然といえるのである。

いずれにしても、滋賀県では、荒茶仕上げという製茶工程が作業歌の伝承に影響を与えたと考えられ、〈茶摘み歌〉と〈茶揉み（しな揉み）歌〉が、今日まで歌い継がれてきたのである。

次に歌詞の特徴についてまとめると、作業歌としての特徴を示す内容については、京都で見られたと同様、作業に関係ある内容と関係のない内容とが歌われていたが、関係のある内容では、作業の性格が歌詞の内容を規定しており、作業に合わせて歌詞が選ばれていた。また、「お茶」には関係しても、作業そのものに関係しない地域の名所や特産などの要素を歌ったものは、異なった作業に共通して歌われていた。以上のことは、茶作り歌の作業歌としての特徴として確認できた。しかし、京都で見られた男女の作業の分担による表現の男女差は、「男女の愛を歌ったもの」については、ほとんどが茶摘みの歌で歌われており、女性の表現ということではできたが、「ユーモアやその他の表現」での男女差については、採集資料の量と内容との関係もあり、確認はされ得なかった。

また、歌詞に関する地域性については、京都で多く見られた「作業と季節の移りを歌ったもの」や「仕事の仕方」で茶摘みの仕方を示す「下から摘む方法を歌ったもの」が少なかったり、逆に京都に少なかった「茶摘みの服装」や「茶摘みで楽をする方法」などを歌ったものが、多く見られたりした。滋賀県内での地域性については、「地域の自然や名所、特産、自慢など」で表現の違いが、政所と朝宮に分かれたこと、「作業の苦しさ、むずかしさ、楽しさなど」で「茶摘みで楽をする方法」が歌われたのは、八日市市以北であったこと、さらに「仕事の仕方」では、政所周辺で多く歌われたことば（「番茶・初葉」など）があったり、政所と朝宮で、仕上げ揉みをする焙烘師の呼び名が「上げ師」と「二番師」というように異なったりしたことなどから、同じ滋賀県内でも、政所と朝宮では茶作り歌の一部に差のあることがわかった。

茶作り作業は、各地での気候の差によって作業時期が多少ずれるため、茶摘み女や焙烘師の出稼ぎが行われ、朝宮と京都南部・土山町と三重県伊勢地方などで交流があったといわれている。

そのことで、茶作り歌も移動が行われたわけであるが、以上のように、滋賀県内での地域差があらわれたり、一部に京都との類似点があらわれたりしたことは、民謡の重要な特質である「歌詞も曲も絶えず動揺しつつ変化してゆく」²⁸⁾ 姿や「共通の唄が各地に移動した」²⁹⁾ 姿を示すものである。この地域性の解明は、民謡の流伝、伝播の特徴を知る上で重要であり、次の音楽的な考察での課題である。

お わ り に

本研究は、滋賀県で歌われてきた茶作り歌について、伝承および歌詞の内容から考察した。滋賀県の茶作り歌の作業歌としての歌詞の特徴は、京都の茶作り歌で見られたと同様の特徴を備えながら、一方で、生産の状況、すなわち、茶作りの質や量が、歌の種類の多少に、また、作業にたずさわる人々の郷土色が、歌詞の表現内容やことばの選択に、影響を与えてきた。

人々の生活と作業歌との関係は密接であり、歌が人々の生活を支えてきたといっても過言ではあるまい。

なお、歌詞の中に、からだに障害のある人に関したことばがあるが、作業歌についての音楽学的研究ということで、伝承され、歌われたまを資料として記載したことをおことわりする。

参 考 文 献

- (1) 筆者は、この調査に主任調査員として参加し、湖東南部の録音調査を担当した。調査の報告書として、滋賀県教育委員会編『滋賀県の民謡——民謡緊急調査報告書——』1986、が出版されている。
- (2) 日本放送協会編『日本民謡大観 近畿篇』日本放送出版協会、1966、p. 8～9 梁島章子「京都の茶作り歌の種類と歌詞についての一考察」『関西楽理研究Ⅱ』関西楽理研究会、1985、p. 41
- (3) 梁島章子、同上書、p. 41～42
- (4) 『日本民謡大観 近畿篇』前出書、p. 69
- (5) 梁島章子「京都の茶作り歌の種類と歌詞についての一考察」前出書、p. 46
- (6) 梁島章子「山城地区の茶作り歌——その作業歌としての音楽的特徴——」『諸民族の音——小泉文夫先生追悼論文集——』音楽之友社、1986、p. 213～235
- (7) 宇治茶製法技術保存協会編『手もみ製造法（宇治製法）』社団法人京都府茶業会議所
なお、筆者は、昭和62年4月24日に京都府茶業研究所で行われた「手もみ製造法」の実演を見学した。
- (8) 前出書、p. 673 の「あとがき」に、本書の資料は昭和10年から40年の間に録音されたと記されている。
- (9) 梁島章子「京都府の民謡」『京都府の民謡——民謡緊急調査報告書——』京都府教育委員会、1983、p. 7
- (10) 若原英式「宇治茶の足跡をふりかえる」『京都 6月号』白川書院新社、1979、p. 17～23
伊藤宗恂他「座談会 宇治茶賛談」同上書、p. 49～53
- (11) 宇治市歴史資料館編『宇治茶——名所絵から製茶図へ——』宇治市歴史資料館、1985、p. 98～103
- (12) 宇治上林記念館 上林春松氏談
- (13) 同上
- (14) 『宇治茶一名所絵から製茶図へ——』前出書、p. 105～106
- (15) 宇治上林記念館 展示解説
- (16) 梁島章子「京都の茶作り歌の種類と歌詞についての一考察」前出書、p. 41
- (17) 同上書、p. 41
- (18) 梁島章子「山城地区の茶作り歌——その作業歌としての音楽的特徴——」前出書、p. 229
- (19) 梁島章子「京都の茶作り歌の種類と歌詞についての一考察」前出書、p. 47
- (20) 同上書、p. 48
- (21) 同上書、p. 51
- (22) 同上書、p. 52、57

- ⑳ 京都府茶業研究所の説明では、和紙で作られている助炭は、茶揉みが行われたあと、いたんだ部分を、糊と紙で修理するということであった。
- ㉑ 梁島章子「京都の茶作り歌の種類と歌詞についての一考察」前出書，p.59
- ㉒ 同上書，p.54
- ㉓ 同上書，p.56～58
- ㉔ 同上書，p.58～61
- ㉕ 町田嘉章，浅野建二編『日本民謡集』岩波書店，1960，p.420
- ㉖ 同上書，p.420